
闇籠り

空無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇籠り

【Nコード】

N7209D

【作者名】

空無

【あらすじ】

彼女は私の大切な友人。罪深く、憎んでもいい筈の私を受け入れてくれた彼女。……彼女は私の、太陽だったんです。

起

「アーシエス。アーシエス・レイ」

閉じた私の耳に、聞き慣れた女の声が届く。

声の主は……確か、ベルモント。ユグリッタ・ベルモント。

湖水の夢を見ていた私は、金板を叩いたような声で起こされた。
空に、下弦の月が浮かぶ頃。人が静寂を打つ時間。

「何の用だ」

「何の用だ、じゃないわよ。一ヶ月も封印しててっ」

そう言つて、私の身体を引き寄せる。

眠ってからそんなに経っていたのか。

道理で身体がだるい。眠り続けたせいで、節々が痛んだ。

「もう、心配になつて見に来て正解だわ。

その内干からびて消えちゃうわよ」

喧しい少女……いや、もう少女ではなくなっていた。

少し紅を引いたような唇は、蠱惑的な雰囲気さえ漂わせている。
けれど私の記憶の中の彼女は、少年さを秘めた子供だった。

「……それもいいな」

自嘲気味に、髪をかき上げながら呟く。

そう、それもいい。この退屈で苦痛な人生を終えられるなら、それでもいい。

「冗談じゃないわよっ」

パシンという乾いた音。

窓辺で、同胞が驚愕の声を上げていた。

「そんな簡単に、そんなこと言うもんじゃないわっ。
貴方には生きていてもらわなきゃ。

生きるためにレイチェルの命を喰らったんだから」

そうだった。

失言だったな、とひとりごちる。

私は、死の渴きに絶えかねて彼女の妹の命を奪ったのだ。
彼女にとって、私が生きていることが贖罪。

レイチェル・ベルモントの姿を映した
本来は姿無き化物であっても

「……君は強いな」

「貴方が弱すぎるだけよ。」

人間はね、弱かったらやっていけないの」

妹の姿をした化物を、何故こつちも優しげに見れるのか。
永く生きていながら、

人の命を喰らい続けていながら、

私はなんて人間のことを知らないのだろう。

彼女はまるで、私が直視できぬ太陽のようだ

承

闇夜が濃ければ、私にとって都合が良い。

忌まわしい日の光も届かず、立ち騒ぐ人影も無い。

僅かばかりの人の行き来が、私の行為に霧をかける。

「お嬢さん、どうしたんです、こんな夜更けに」

街灯に近い、アパートメントの入り口に腰掛ける。

少女の姿は都合が良い。

その様でいれば、紳士であろうとする男が、容易に釣れる。

今宵も一人。

「靴を……」

衣服の裾を少しだけ持ち上げ、壊れた靴を見せる。

さてこの男はどう出るか。

馬車も、靴屋も、今は開いてはいない。

男が、少女が夜更けに外にいる理由に相応しくないとはいつかどうか。

「これはこれは。

お嬢さん、私の家まで来ませんか」

家に帰れば娘の靴を貸して差し上げられますから、と。
今宵の獲物が決まった。

「お言葉に甘えてもかまいませんの？」

「勿論ですとも。さあ、参りましょう」

ふわりと抱き上げられる。

どうしても、壊れた靴で歩かせたくはないらしい。

それはそれで都合が良い。

襲うまでの動作が少なくて済む。

「あの……」

「歩かせるわけには参りませんので。

しばらくご辛抱願いますよ、お嬢さん」

軽やかに歩いていく男。

ああ、街灯の切れ目は何処だろうか。

極上の魂の匂いがする。

ああ、早く闇の隙間は無いだろうか。

私を退屈させぬようにと話しかけてくる。

優しい男だ。

優しくて、暖かくて、だからこそ狙われる。

不運な男。

闇が来なければ最後の月夜にはならなかっただろうに。

「……貴方の命は私の中で、私を生かすために生き続けるんだ」

壮年の男。

命の味は甘かった。

私は私が喰らった命の集合体だと、教えてくれたのは貴女

転

森の中は平穏だった。

同胞達が人間を威嚇するから、普段森に人はいない。

「いい闇夜だね」

同胞達に歌を聞かせながら、背中を撫でさする。

気持ちよさそうに、目を細めて。

ベルモントの娘に会ってから変わった私を、非難することなく。

「人の命は私の中で、私が生きる限り続くのだそうだよ。

そう考えると気が休まるよ。

今までの私は、人の命を喰らうことに罪悪を抱いていたから」

尤も、神の祝福の無い私に屠られて、命が天に行けるかは知らない。
い。

そこまでは考えられない。

私は、私が行けぬだろう天を知らないから。

「相変わらずの異端振りだな。

それに、随分可愛らしくなったな」

背後からの声に、背筋を凍らせる。

気付かなかった自分が情けなく、気付かせなかつた相手が恐ろしかった。

「ヒューザスっ」

「アーシエス、気分はどうだね、わたしの子よ」

「誰がお前の子であるものか。」

「例えお前によって成された呪いであろうとっ」

森の中は平穏だった。

私の心とは裏腹に。

同胞は私より強いものの存在には逆らわない。

風が草をなぶる音しか、耳に届かない。

「……誰？」

廃屋の向こうに、彼女がいた。

何故、と思う前に言葉が口をついて出た。

「来てはいけない、帰るんだっ」

「アーシエス？ その人は、誰？」

「呆れたな、人間とそこまで交わるとは」

「帰りなさいっ」

彼女の歩が進むことが恐ろしかった。

化物は、すべてが彼女に優しいわけではないのに。

少なくともこの男は、自分以外の誰も愛さないのに。

「ベルモントッ」

私が愚かだったのか。

私が彼女の元に通えばよかったのか。
そうすれば、彼女から光を奪わずに済んだのに。

貴女は私の太陽なんです、例えば光が失われても

結

街は大騒ぎになっていた。
森の中への搜索も思案されたく、がさがさと草木が煩かった。
同胞達も、今日ばかりは人間達のために森をあけた。

「アーシエス……」

光を失った彼女は、それでも太陽のように輝いていた。
彼女は太陽。では私は月なのだろうか。
そうかもしれない。
彼女が私を変えてしまったから。
けれど、私のせいで彼女が変わってしまうとは思ってもいなかった。
た。

「アーシエス、嘆かないで。私はいいから」

私と同じモノになってしまったのに。
もう二度と日の当たる場所に行けないのに。

「ベルモント……私は……」

レイチエルの身体を借りている私は街を歩けるのに。
もう彼女にはそれができない。

「嘆かないで」

心の何処かで、こうなることを望んでいたのだから。
そう言って、笑う。

やはり、私は、彼女に深入りしなければよかった。

「さあベルモント。」

アーシエスと遊びなさい。

どちらが私の子足りうるかを見極めるために」

ヒューザスの声が脳に響く。

彼は眷属は要らない。子を作るのも道楽。

思い出す。私もまた、かつて、兄弟を屠ったことを。

兄弟を屠る。残った一人を彼は子と呼ぶ。

「さあ、遊びなさい」

私は何人の兄弟を屠ってきただろう。

異端と呼ばれながらも、私はすべての兄弟を屠った。

昔も、今も、私は彼の長子なのだ。

「ねえ、アーシエス、可笑しいわ。

身体が貴方を殺そうとするの」

私は、どうすれば良いのだろう。

私の命で彼女の生を繋げるか。

私が彼女を屠って、姉妹諸共私の血肉にするのか。

ああ、でも彼女はもう決めている。

「アーシエス、私、もう十分よ」

貴女を屠って、生き続けることこそ貴女達への贖罪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7209d/>

闇籠り

2011年1月16日01時33分発行